
黒いカラス

異端

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒いカラス

【Nコード】

N8000U

【作者名】

異端

【あらすじ】

ある日、一人の少年が古い屋敷で『本』を見つける。

そこで会ったのは、黒い羽根が生えた子供。

それがすべての始まりだった。

世界（前書き）

後日・・・編集、修正いたしますのでご注意ください。

世界

この世界には、4つの世界がある

神の世界、天の世界、魔の世界、人の世界がある。

だが、「人の世界」は「他の世界」（神の世界、天の世界、魔の世界）を知らないのだった。

人の世界では「人間」が生きている。

「人間」は、「死」すれば天の世界と魔の世界の2つの世界に逝かなければならない……

その「人間」を「死」、「判定」などを下しているのが「死神」なのだ。

「死神」は「神の世界」の使い……「死神」は、強ければ強いほど大きな位をもらえる。

「天の世界」の「天使」と「魔の世界」の「悪魔」もそうである。

「天の世界」とは、「死した善の人間」が逝く場所である。その「天使」とは、「死した善の人間」がどれほどの「善」なのか判断し、どれほどの「楽」にするのか。

「魔の世界」の「悪魔」もそうである、「魔の世界」は「死した悪の人間」が逝く場所、「悪魔」とは「死した悪の人間」がどれほど「悪」なのか判断し、どれほど「苦」にするのか。

だが死神、天使、悪魔になれるのは3つの世界の神の世界の一番下に生まれた者が死神になるのだ。

天使は、天の世界に生まれた者。悪魔は、魔の世界に生まれた者。

……どれも同じ様に生まれる。

そして3つの世界に生まれた者は、同じ様に100年たてば、「3

つの試験」を受け、良い成績を得ればなられるのだ。

この4つの世界の関係はまだあるが、その関係を壊すような「大事件」を「人間」と「人間ではない者」が起こすとは、「神」も思わなかったそうだ。

始まりの本（前書き）

後日・・・編集、修正いたしますのでご注意ください。

始まりの本

それは梅雨が終わって、夏休みに入り間もないころ

一人の少年が祖父の屋敷を無理やり掃除させられていた

「あゝあ、なんで俺がジジイの家を一人で掃除しなきゃいけないんだ！」

少年は古びた屋敷の倉庫を整理していた

「！・・・なんだ、この本・・・すっげー古いけど」

少年はその本を開いてみました

昔々、遙か昔の話

人が生まれる前の話

美しき翼をもつ天の世界

汚れた翼をもつ魔の世界

二つの世界は争いあった

天の世界と魔の世界の間

精の世界をまきこみ争った

天の王 成人になつた若き王

魔の王 操られた幼き王の子

二つの世界に何があつたのか分からず

1200年の時が流れた

争いは終止符を迎えようとする時

全世界に紅く染まつた光が走った

その光は何なのか分からず

それだけではなく

全ての始まりの神の世界

神の世界をも争いはじめた

神の世界 精の世界 天の世界 魔の世界

この四世界が争いあった

争いは10792年もの時が流れた

全世界はこの行為に気づいた

そして白き光が現れ世界は静かになりはじめた

その争いが終わった

だが・・・何故かある世界ができた

その世界は何故出来たのか

この争いと同じように

それは神さえも・・・誰も知る由は無い

人の世界

この人の世界は・・・

本にはそう書かれていた

「はぁ！ えっ、なんかのおとぎ話？聞いたことねえよ！！！それにあとのページは真っ白で何も書かれてねーし・・・うん！？」

本の最後のページには見たことのない扉のようなものが描かれていた
「・・・なんじゃこりゃって、こんなことしてる場合じゃねえ！早くこのめんどくせー掃除を終わらせなきゃいけねえ！！！」

少年は本を閉じようとした時だった

描かれた扉が開き黒い羽根が散った

「うわぁ！！！」

黒い羽根と共に小さな子供が本から飛び出した

「！？」

始まりの本（後書き）

小説の少年の容姿

黒い長髪で眼は銀色

長袖のシャツとジャージをはいている

身長は160〜170センチくらい

書きそびれたので、ココに書いてしまいました
すみません

小さな悪魔（前書き）

後日・・・編集、修正いたしますのでご注意ください。

小さな悪魔

「!?!」

「こんにちは!僕、カラス!!!」

「あつ、えつうん・・・お・・・こ、こんにちは・・・つとあのえつと、お・・・俺、三日月 軌跡・・・!?!?!?」

「よろしくお願ひします!!!」

「あつ・・・お、おお・・・つて、ええ!な・・・何だこれ!!!」
「???」

(えつ!!!・・・いや何?こ・・・これ、ゆ・・・夢だよな、いや絶対夢だ!こんな本からガキが出てくるわけがねえ!!!今すぐ覚めろ!俺!!!)

軌跡は目の前の状況に混乱していた

無理もないだろう、聞いたことのない話を書いてある古い本に、描かれた見たことのない扉からまだ八歳くらいの小さな子供が出てきたのだから・・・

子供はカラスと名乗っていた

「!?!・・・お、お前!!せ・・・背中!!!」

「?・・・あつ、背中の中?」

「あつ・・・ああ、なんで背中に、黒い羽根・・・やつぱ、夢?」
「?」

「夢じゃないよ!」

カラスの背中には黒い鴉の羽根が生えていた

(あゝあ、やつぱこれ夢じゃねえの?)

「へえ〜ここが人の世界かあ〜なんかわくわくしてきた!!!」

「はあ!ひ、人の世界!?な・・・何言つてんだよ!お前!!!」

「あつ!僕、魔の世界から来た悪魔の魔獣なの!」

「あゝ悪魔か・・・あつ!!!悪魔あ!」

「うん!悪魔」

(いやいや！あつ悪魔！！魔の世界つて魔界！ああもつ！！早く覚めろ！俺！！！)

軌跡はカラスのいきなりの発言にまた混乱した

「ぼくはね！、その「始まりの本」を使ってここに来たの！！！」

「本って・・・あのぼろくて古い本？」

「うん！四世界の一つずつにあるんだよ」

「えっ！あの本の扉みたいなのは？」

「うん！あの扉に呪文を言えば、他の世界に行けるんだよ！」

「四世界つて・・・あの扉に書いてあった神とか天とかの・・・？」

「えっ！？ちよつとその本見せて！」

「あつお・・・おう」

軌跡はカラスにその本を渡しました

カラスは本を読み始めました

「あつ、そつか！本の内容は四つに分けられてるんだっけ・・・」

「はっ？分けられてるってどういうこと？」

「えっ！あつ、うんとね・・・この本はね、四つあって・・・四世

界に「ずつあるんだ・・・それで、この本はこのお話の続きってい

うか・・・続きがあとの三つの本に書かれてるの・・・」

「う・・・うんまあ、つまり元は・・・っていうか、この話は四つ

に分けていて、その四つの話が四つある本に分けられていると・・・

「・・・

「うん！」

「で・・・この本の話にはちゃんと続きがあると・・・」

「うん！そういうこと」

(つーか・・・なんかこの本の話が本当にあつたみたいない感じ・・・

)

「あのさーこの話も・・・なんでか背中に羽が生えている子供も聞いた

ことないんですけど・・・」

「そりゃそうだもん！人の世界だけは「死神」以外、入ったらいけ

ないから！」

「しっ
死神！」

小さな悪魔（後書き）

小説の少年・・・三日月 軌跡

カラスの容姿

6～8歳くらい

背中に黒い羽根が生えている

髪は短く、黒髪

眼は暗い金色

服は、全体的に黒い

はだし

またまた書きそびれたので・・・

死の使い（前書き）

後日・・・編集、修正いたしますのでご注意ください。

死の使い

「しっつ死神！」

「うん！死神」

「うつつうんなもん、テレビだろ！ただの作り話だろ！」

「うん、見た人はいると思うよ！だって死神は人と同じ姿なんだから！！！」

「・・・鎌・・・持つてるって・・・」

「あつ・・・それは死神の武器！それぞれ種類がちがうよ」

（死神の武器・・・うわーなんか・・・もう）

「あとねえ・・・死神って神の世界から来てるんだよ！」

「えっ、へえー・・・う・・・うんじゃあ、お前の後ろで鎌をかまえている奴・・・が、死神？・・・かな・・・」

「えっ！」

カラスの後ろには、大きな黒い鎌を持った人間がいた

「ああ！この人！でも、人の世界にいる死神はランクが低くて、鎌しか武器を持ってないんだよ！」

「ああ・・・それで鎌・・・ってなんでその死神がここにいるんだよ！！！」

「あ！！！」

『魔の世界の住人、なぜここにいる？』

そう死神が言うつと鎌を振り上げ、大きな爆発音のような音が響いた屋敷の一部は爆発でもおきたかのように破壊され、カラスと軌跡は外へ逃げた

「えっ、やっぱ死神って人間の命、狙うの！？」

「うん、まあ・・・人の命、人生の判定とかするから・・・死神のピンゴブックとかに載ってたりとかした人は・・・死ぬね！！！」

「は！、し・・・死ぬ！！っ！か判定って！？」

「あ！来た！」

「ああ！」

（あゝもう！この状況どうすりゃいいんだ！どうみても夢ってレベルじゃねえし！それにさっきの左足が痛てーし！！血も出てるし！！！！やっぱ夢じゃねえのかよ！！）

『どうしてここにいる？魔の世界の住人！！』

「なんか言ってるぞ！カラス！！！」

「あ、うん・・・死神さん・・・じつ実は・・・」

（うん？なんか大事なことでここに来てんのか！！）

「勝手に来ちゃったの！」

「はあ！？」

『・・・』

「本当は来ちゃったらいけないんだけどね」

カラスは今までのこの状況をも関わらず、何もなかったように笑っていた

『ならば、処理する！！！！』

「ええー！」

「お！」

異界への扉（前書き）

後日・・・編集、修正いたしますのでご注意ください。

異界への扉

二人と死神はまるで追いかけてくをしているように走り続けたまま、死神は大きな鎌を振り上げた

「うっわあ！！！」

「おー！すごい、すごい！！！！」

「うんなこと言ってる暇・・・」

死神は二人を鎌で切ろうと振った

「ああ！！なつ・・・なんで俺まで！！！！お・・・おい！カラス・・・
・・・なんとかしろ！」

「え！えつと・・・あつ！そうだ、持ってきたこの本を使えば！！！！」

「えつあ！なら早くしてくれ！！」

「でも、これやったらこの世界以外のところに来ちゃうよ？」

「あゝあ！もう何でもいいから早くしてくれ！！」

「うん！」

カラスは走り続けたまま、持っていた「始まりの本」を開いた

「よし！いつくよ！！」

「ああ！」

『！？・・・何をするきだ！！！！』

「開け！この時、人の世界とのすべての扉よ・・・我、もう一つの者、この二つの身・・・異界へとつなががよい！！！！」

「ああ！呪文つてうんな単純つてか・・・どうみてもただ・・・うつ・・・ああああ！！！！」

『まさか！おまえら・・・待て！！！！』

死神の声はもう遅く・・・すでに二人は白き本の中の光に引きずり込まれ、残ったのは「始まりの本」だけだった

「うっああああ！！！！（軌跡）」

「うっおおおお！！！！（カラス）」

いつのまにか、二人は暗い物置のような部屋にいた

「なんだよ・・・ここ、どこだ？」

「うーん？お！きつとこの本が「始まりの本」だよ！」

「え！うんじゃあこの本から出てきたのか・・・ってここ・・・もつもしかして・・・ちがう世界？」

「うん！さしずめここは、この感じだと・・・神の世界の一番端の、そのまたはずれの、人を判定する上級死神の裁判所！！！」

「さっ裁判所ーーーー！！！」

「うん！裁判所」

すべての裁判所（前書き）

後日・・・編集、修正いたしますのでご注意ください。

すべての裁判所

「さっ裁判所ー！」

「うん！ 僕もここは初めて来たけどね！」

「裁判所って……」

「この裁判所はね 死んだ人間を判定するんだよ」

「死んだって……幽霊かよ！！！」

「うーん まあそんなもんだね」

「なんで裁判所？」

「人の世界で言うとな 死んだ人が天国へいくか……それとも地獄へいくのか……を裁判するの！ 裁判は死神やってるんだけどね」

「あははは（なんか本当にオカルトじみしてきた）」

「！」

「どうしたんだ？」

「近くに誰かいるよ」

「えっ」

部屋の外では複数の足音と話し声が聞こえた

「マジで！！（なんかヤバくなってきた つーかこの状況もだけど）」

「

「うーーん よし！」

「へ？」

「逃げよっ！」

「そのくだりでそれかよ！」

外の複数の者は二人に気づき部屋のドアを勢いよく開けた

「に……人間！！！」

「隣にいるのは魔の住人か！」

「ほら！ 軌跡が大きな声を出すから！！！」

「あーもう、知るか！」

「とりあず！ にーげよつかあ！！」

「お前のユルさをまずどうにかしてくれ」

「？・・・なんか言った！？」

「いや、なんでもない・・・逃げるぞ！」

「うん」

そのまま二人は部屋の窓を突き破り走った

異界の裁判所（前書き）

後日・・・編集、修正いたしますのでご注意ください。

異界の裁判所

二人は足を止めた

「なんだここ・・・？」

周りには黒いレンガの床と真白な空に紅い月が浮かんでいた

「うつわー じっちゃんの言うとりだー」

「・・・おまえ 来たことないのか？ ていうかーじっちゃんて誰？」

「うーん」

「へえー そつ・・・」

『いたぞー』

「やつべー 来た！」

「それじゃあ、はつしろー！！！」

「ああ・・・わかった やつぱユレーな・・・」

二人はまた黒いレンガの床を走りはじめた

二人の後ろを死神達が大声をだして走っていく

『ゴラー 待ちあがれー』

『なんで人間がいるんだ ついでに魔界の・・・』

死神達の大声を二人は無視し走っていく

「ハアつと・・・何人いるんだよ 死神ー」

「わかんない」

「おいつつつ！」

二人は黒いレンガの門を走り抜けた

「げっ！ この門を抜けてもまだ続くのかよ！」

「うーん 裁判所の敷地はけっこー広いらしいからねー」

「敷地つてどのくらいだよ！」

「それにしてもさー」

「なんだよ」

「軌跡は人間なのによくが走れるね！」

「はあ？」

「あつ！ 前からもいつぱい来た！！！」

「マジで！！！」

そう言っている二人をよそに死神達は走るのやめて話し合っていた

「あーなんでアイツ人間のくせにあんなに走れるんだあ！」

「そんなことよりあの人間どうします？」

「どうするもこもねーよ あれどーみても肉体があるじゃん」

「確かにそうですねー 生きてますし……」

「これだと上にはばれる前に殺っておかなきゃなあ」

「そつすねー 早く零体なっておかなきゃ、ごまかしようがないっすからねー」

「ああ あの黒羽の奴はー牢屋にいれとくか！」

「そつすねー 黒羽はなんとかなる……ヒッ！」

「どうした？」

「先輩……うっ後ろ……」

「はっ？ うしろお……」

そう言っつて死神は振り向いた

「……アラクネ様……ドールアイ様……」

死の使いにて裁判官(前書き)

後日・・・編集、修正いたしますのでご注意ください。

死の使いにて裁判官

その頃、カラスと軌跡は追手を振り切っていた

「ここまで来りや大丈夫だろ」

「うん！ たぶんそうだね！！」

少し息を切らしながら軌跡が言うと、カラスは元気に笑いながらこたえる

「たぶんって何？」

「たぶんはたぶんだよ どうやって出よつか？」

「……」

何も無いように笑うカラスに神は何も言えない

その時、カラスが背に何かを感じた

「！！」

「どうした!？」

カラスと軌跡のまわりには、女と子供がいつのまにかいた

女は黒髪で、左腕には黒い蜘蛛の絵柄がはいつており、10代から20代に見える

子供は人形のように無表情、身長はカラスと同じくらい、杖をもっている

「魔の住人でも俺たちの気配が分るんだな」

黒髪をの女が言う

子供は何も言わない

今度は黒髪の女は、何かに気付いたように言う

「おまえ、どうみても住人じゃなくて魔の獣じゃねえか」

軌跡は二人の様子をみながら冷静に状況をみる

「おまえらは何者だ？」

軌跡の問いに黒髪の女は簡単にこたえる

「俺はアラクネ この管理者・・・ひとことではいえば霊体の裁判官な そこにいる無口で人形みたいなのが、ドールアイだ おまえ

人間だな」

「はい そろそろですけど」

「なんで魔獣がいんのかはどうでもいいけど……人間は相
当厄介」

「俺をどうするつもりっすか？」

「うん 死ね」

「!!!!」

アラクネと神の会話が終わると、カラスは軌跡の腕をつかんで走り出した

「おい……ちよつとまって!!!!」

「逃げなきゃいけないよ？」

「そうじゃなくて! はやいんだよ!!!!」

「え……でも」

「つーか……おまえ羽根あるんだったら飛べよ!!!!」

「あ……忘れてた」

「おい!!」

カラスは羽根をひろげ、飛ぶ

死の使いにて裁判官（後書き）

死神二人 容姿

アラクネ

露出度の高い服装

紫色の長髪、黄色の眼

ドールアイ

人形に着せる服を着ている

レースなどは少なめ

金髪のショートカット、青い眼

またまたまたココに来ました

以後、気をつけたいと思います

死神の牢獄（前書き）

後日・・・編集、修正いたしますのでご注意ください。

死神の牢獄

「うおおおおおおお!!!」
軌跡の叫びがこだまする

カラスが軌跡の腕を掴んで黒い羽根をひろげ飛ぶ

「おい！ カラス!!! どこまでいくんだよ」

「う~~~~ん どこまでも!!!」

「なんじゃそりゃ!!!!!!」

相も変わらず会話をしているとカラスの羽根が砕けた

「!!!!」

「!!!!!!」

黒い羽根が砕け、カラスは軌跡とともに落ちていった

「カラス！ 大丈夫か？」

「.....」

「よし！ あつたりー」

カラスと軌跡を追っていた死神の一人、アラクネがガッツポーズを
して言った

「.....アラクネ 羽根全部落とさなきゃ」

今まで一言も発しなかった死神ドルアイが不機嫌に言った

「風の抵抗があっただけだ」

「そう」

「さーて どこに落ちたかな」

カラスと軌跡は建物をつらぬいて落ちた

「うつつつ.....カラス？ 大丈夫」

すぐに起きた軌跡は、カラスの羽根のおかげで重傷は負わなかった
軌跡は、すぐそばに倒れているカラスをゆすった

「カラス！」

「うん？」

軌跡がゆすって呼びかけるとカラスは起き上った

「うっおー」

「！？ カラス・・・大丈夫か？」

「うん！！ だいじょーぶ 羽根が折れてやばいけどね！」

「うん・・・まあ大丈夫じゃないみたいだけど、相変わらず頭の
ぼうが一番大丈夫じゃあないみたいだな・・・」

「？」

「いや・・・なんでもない」

「それにしてもここ・・・どこだろー？」

「・・・牢・・・獄？」

カラスと軌跡のまわりには牢屋があった

「ラッキー！！」

「！！！」

カラスと軌跡が落ちて、つらぬいた穴から死神のアラクネが見えた
「おかげさまで・・・この場所までおまえたちをつれてこなくてす
んだ」

「うんじゃ・・・ここは俺たちの牢屋ってわけ？」

「そー！」

軌跡は、牢獄だと知るとカラスに話しかけた

「どうしましょうか？ カラスくん」

「やっぱ逃げるっしょ」

「やっぱそうか」

「うん そー！！」

カラスは軌跡の言葉に返事をしようとしたとき、背後に勢いよく爪
を立てた

「！！・・・どうした カラスー！！！」

カラスの振った腕は死神のドールアイがつかんでいた

軌跡はいつのまにかカラスの後ろにいたドールアイに驚くと、カラスは何も言わずもう片方の腕を使ってドールアイを殴ろうとした
ドールアイは殴られる前にカラスを蹴った

「カラス!!!」

「.....」

壁に大きな音が暗い牢獄に響く

カラスは壁に叩きつけられ、軌跡は大声をあげる

ドールアイは無表情のままカラスのもとへと歩く

「おい待て!!! おま.....!!!」

軌跡がドールアイに向かって怒鳴っていると、アラクネに頭をつかまれた

「おまえ黙れ」

「.....!」

「アイツはこの地下の牢獄にいられるんだ おまえも俺たちと一緒にあそこに来てもらう」

アラクネは窓に向けて指をさす

窓の外には大きな城の塔のような建物があった

軌跡がアラクネにおずおずと聞く

「あそこで何すんですか？」

「おまえをはりつけにして魔の世界に送る」

「!!!」

囚われた鴉（前書き）

後日・・・編集、修正するのでご注意ください。

囚われた鴉

牢獄の中で鈍い音が聞こえた。

暗い、暗い、よく音が響く牢獄のとある牢屋に死神がいる。

死神のカタチは愛想のない人形。

何が映っているのか分からない虚ろな眼で、鎖に繋がれたモノを見ていた。

沈黙の中、死神はゆつくりと話し始めた。

「魔の獣は何故、人間ときた？」

死神の問いに、鎖に繋がれたモノ何も言わない。

「………本当に魔の獣？」

何の反応も示さない、死神は鎖に繋がれたモノの首を強引につかんだ。

「そもそも、魔の獣にそんな羽根はもたない」

”聞いているか”と、つかんでいたモノを揺さ振った。

その時、鎖に繋がれたモノが腕を上げ、死神の頬に手で触れた。

鎖に繋がれたモノは死神に顔を近づけ、耳元で言った。

直後に、鎖に繋がれたモノは黒い羽根をひろげ、死神に抱きついた。

死神は呼吸ができかねないかのように声を出し、

血の涙を流した。

白く輝く光（前書き）

後日・・・編集、修正をいたしますのでご注意ください。

白く輝く光

彼は今、記憶の断片を探している

軌跡は抵抗せず、アラクネという死神につれられた。

カラス、大丈夫か？ あの人形みたいな死神に捕まって

そう、考えながら軌跡は笑っていた。

それを見ていたアラクネは少しは考え、軌跡に言った。

「おまえ、よく笑ってられるな」

アラクネが言っても、軌跡は変わらず笑ったままだった。

歩き始めて、数時間。大きな4つの扉の広場へとついた。

「あの黒い扉の先が、魔の世界だ」

軌跡はそれを聞き、黒い大きな扉を見た。

黒い大きな扉は、どんよりとしたようなものを軌跡は感じた。

アラクネは、広場の中心にある柱に軌跡を縛りつけた。

縛りつけられたときの痛さで、軌跡は声を出す。

「ここじゃあ、人間は簡単には殺せないんだ」

アラクネはため息をつき、言いながら軌跡を縛りつけていった。

「あ！」

アラクネは思い立ち、軌跡に最後の質問をした。

「おまえ、どうやってここに来た？」

軌跡は、痛みに苦しみながら笑って返した。

「カラスをどうするのか、教えてくれたら言うよ」

「カラス？ あー、あの魔獣のことか」

「.....」

「何も・・・そのうち殺すけど」
素っ気なくこたえたアラクネの言葉に、軌跡は驚きよりも怒りが増した。

軌跡は小さく何かを口ずさんだ。

「!？」

アラクネは気になり、”なんて言ったのか”と軌跡に聞いた。

「死ぬっていうのに走馬灯もあらしねえ」

悲しげに笑った。

「熱っ!!」

言ったとたん、軌跡の肉体が熱くなり始めた。

声にならない衝撃に軌跡は少し頭の中が白くなった。

その瞬間、軌跡に向かって上から白い光が落ちてきた。

その白い光は軌跡を覆い尽くした。

「なっ!!」

アラクネは驚き、軌跡から距離をとった。

距離をとったとき、広場の床や壁、天井に亀裂が走った。

「おまえ、なんだ!？」

アラクネの声が響く中、突然壁が砕かれ、黒い羽根が舞う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8000u/>

黒いカラス

2011年10月8日21時58分発行